

[23] radix : 九州大学全学共通教育広報

<https://hdl.handle.net/2324/20388>

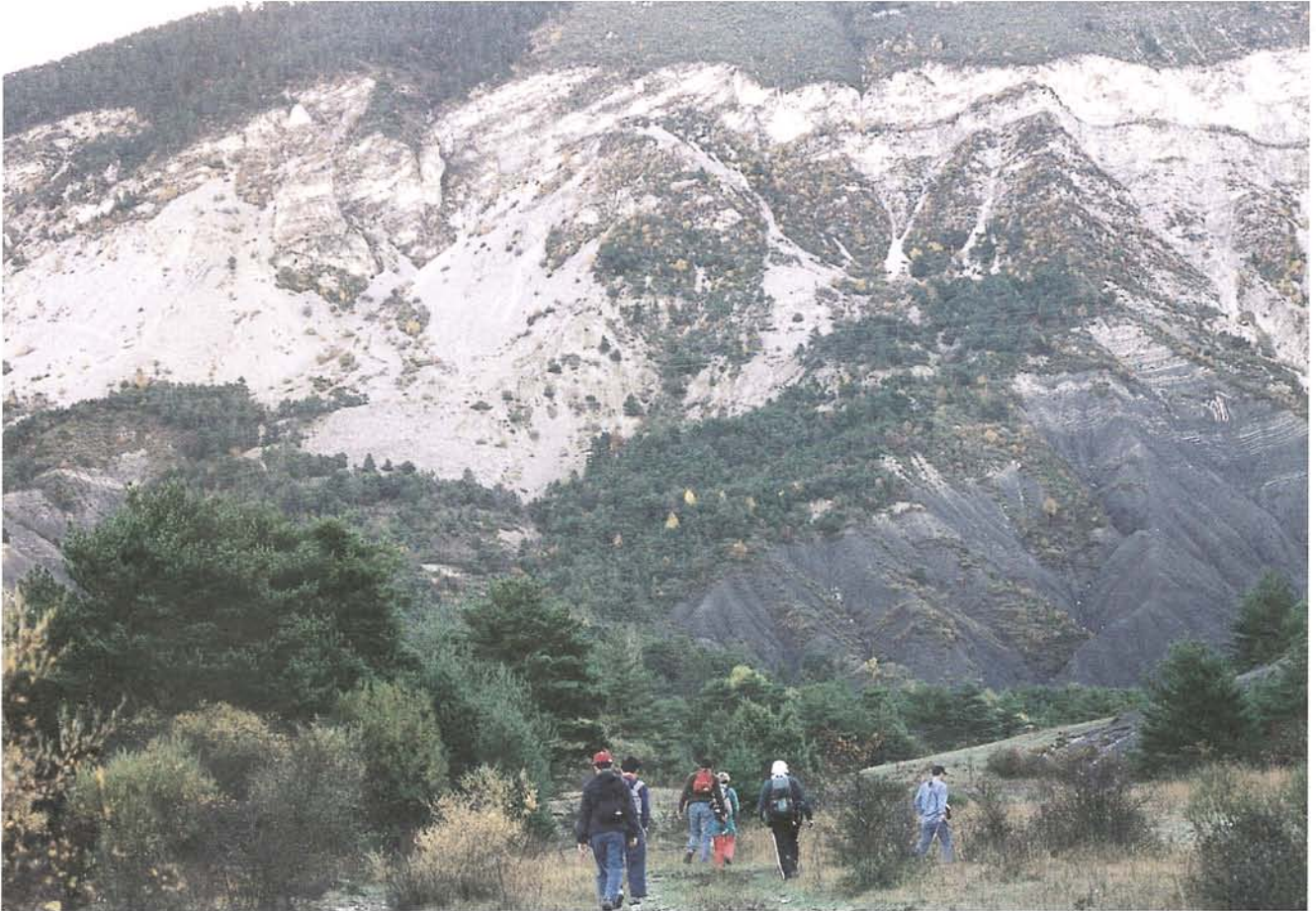
出版情報 : radix. 23, 2000-01-12. 九州大学教養部大学教育研究センター
バージョン :
権利関係 :



radix

radix (ラーディクス) は、根、根源を意味するラテン語。ヒトの根源にまなざしを向け、豊かなこころの根を広げたい。

2000. 1. 12
九州大学全学共通教育広報 No. 23



南フランス・Moriez 付近 (19頁参照)

君が代法制化について……………細川 明子… 2
御笠川の生態……………松尾 寛之… 4

サークル紹介 15

東を向きては清き多々良の流れに身を委ね
池田 法史… 7

世界・日本 4

留学体験略記……………東端 玄… 8
留学生生活を振り返って……………新谷 奈々… 9
ドイツでの出会い体験記……………村川 寛…10
ケンブリッジ語学研修レポート…井上久美子…11
韓国の伝統芸能・パンソリ……………申 忠 均…12
「少人数ゼミナールA」を担当して……………根本 道也…14

「歩き、み、ふれる歴史学」……………服部 英雄…16
公開講座 「超」学問のすすめ……………17

森 茂太郎 ・ 阿尾 安泰
岡野 進 ・ 高藤 冬武
福元 圭太 ・ 南條 竹則

新任教官自己紹介……………20

伊藤 一男 ・ 江藤徹二郎
大月 美佳 ・ 佐藤 丈
中里見 敬

九大を去るにあたって……………22

有村 隆広 ・ 三枝 豊平
園田 五郎



君が代法制化について

文学部1年 ^{ほそ}細 ^{かわ}川 ^{あき}明 ^こ子

1. 君が代ができるまで

そもそも君が代が生まれたのは、1869年（明治2年）、薩摩藩砲兵隊長（後に陸軍大臣）の大山巖が欧米諸国の例に習って、天皇が臨席する式典で演奏する歌が必要だと考え、古歌から歌詞を選んだとされる。歌詞は『古今和歌集』に由来するが、その初句は「わが君は」であり、「君が代は」となったのは『和漢朗詠集』の一写本に始まり、読み人知らずで載っている。もとの和歌の「君」は天皇ではなく一般的に「あなた」を指し、長寿を祝う歌だともいわれている。

曲は最初、軍楽隊教師でイギリス人のJ.W.Fentonがつけたが、日本人には合わなかったのか定着しなかった。彼の後任として、海軍軍楽隊の教師にドイツ人 Franz Ecker が雇われる。1880年（明治13年）、国歌「君が代」の選定委員に加わり、林広守と奥好義の合作の旋律に伴奏をつけ、同年11月3日の天長節（明治天皇の誕生日）に宮中で洋楽器による最初の公式演奏が行われた。その時提出された譜本の挿絵は、ドイツ人 Curt Adolf Netto が描いたものである。もっともこの曲を国歌とはさだめず、別に国歌を制定しようとする動きもあった。

このように君が代は多くの外国人の手で作られたものである。日本人が作った曲でないものが日本の国歌になることに疑問を感じずにはいられない。私自身、このことをドイツ人の先生に聞いて初めて知った。この事実は君が代を国歌にすることに対してマイナスになるので国民に教えないのではないだろうか。また、この曲は日本の国歌として作られた曲ではなく、天皇への献上曲であった。こうした点からも国歌としての君が代の成立は曖昧なものだったといえる。

君が代の普及は1890年の教育勅語発布以後、学校を通して強力に進められた。91年には「小学校祝日大祭日儀式規定」が制定され、儀式では当日にふさわしい歌をうたうことが指定された。次いで93年君が代は「祝日大祭日唱歌」の一つとして官報で告示された。君が代は国歌とされることはなかったが、学校儀式で国歌として扱われるようになり、日清・日露戦争に際

し国威発揚の手段として利用され普及していった。

2. 君が代法制化の疑問点

1. 法制化の意義

野中広務官房長官は法制化の意義を次のように述べた。「日の丸・君が代は国民の間に慣行として定着する一方で、教育現場を中心に対立や争いのもとになってきた。交渉にあたっている人が成文法の根拠がないことに苦しみ、……根拠を明確にする必要があると考えた。」

法制化の口実に用いられた「社会的定着」の背後にあるのは貧しい現実である。日の丸・君が代を併用する象徴儀礼にたいして同調を強制する措置が積み重ねられ、各地で教師や父母をまきこむ社会的な軋轢が生まれた。この強制圧力が異常に高くなり、板挟みになった広島県の高校長が自殺した。法制化することによってこのような事件や教育現場の混乱がなくなると考えるのはあまりにも安易である。

外国ではどちらかというと国旗の方が法制化されている率が高く、フランス、ドイツ、イタリア、ノルウェー、中国などは憲法で定めている。これに比べ国歌の法制化は世界の趨勢とまではいかない。ドイツは帝国主義を思い起こさせる1番と2番の歌詞を外し3番のみを国歌としているが、大統領と首相の書簡が根拠で法制化されていない。イタリアは制憲議会の申し合わせ、中国は全国人民代表大会の決議が根拠、韓国は愛国歌が国歌に代わるものとして用いられており、いずれも国歌と異なる扱いとなっている。フランスは国旗と同様に国歌も憲法で定めているが、イギリスにはどちらにも法律はない。そういう意味でもわが国でも今回は日の丸の法制化にとどめておくべきだった。

朝日新聞社による全国世論調査でも日の丸と君が代との間には落差がある。親しみ、法制化の必要性のいずれも日の丸に比べ君が代は低く、法制化では必要、不要が4割台に並んだ。法制化については意見が二分されており、議論を尽くすことが求められていた。

国旗、国歌に敬意を表する態度は世界各国に共通し

ている。しかし、思想、信条からそれらを拒む人もいよう。儀式嫌いもあるかもしれない。その自由を尊ぶ。この基本を歪めてはならない。押しつけは良くない。

II. 学校現場への影響

国としては、日の丸・君が代を強制したり義務化したりしないと政府は言うが、許される指導とあってはならない強制的境界線が曖昧のままである。そのため、法制化を受けて教委など行政側が強硬な姿勢に転じて、結果的に学校現場での対立が激化する可能性も否定できない。指導要領で決められたことを指導しない教員に対し、教委が懲戒処分を行うことがありえると言われている。現場の教員は処分を受けないようにするため、歌わない児童・生徒に対し何らかの強制をしよう。しかし、これは児童・生徒の内心に立ち入って強制してはいけないということに反する。

教育現場ではこの問題について議論を許さないという雰囲気がある。日の丸をただ揚げ、君が代をただ歌うだけの教職員がさらに増えるだろう。日の丸・君が代の歴史的な背景を教えなくなり、「自分は嫌いだ」という選択の自由を子供たちから奪うことになる。様々な個を認め合う大切さを教えるべき学校が、個を束ね取り、自由な良心を踏みじめる場になりかねない。

入学式も卒業式も学校にとっては極めて重要な儀式であるが、あくまで学校行事であって国家行事ではない。学校行事の企画、運営はそれぞれの学校の教職員と生徒会との合意で独自に決定すべきである。各学校にはその学校の歴史と伝統をふまえて作られた校旗と校歌がある。自校の校旗を掲揚し、校歌を斉唱することこそ、新入生を迎えるにも、卒業生を送り出すにも一番ふさわしく、また自然であるように思う。

III. 君が代の解釈

小淵恵三首相は99年6月29日の衆院本会議での答弁で、日の丸・君が代を国旗・国歌とする法案の焦点の一つである君が代の歌詞の解釈について、「君が代の『君』は日本国および日本国民の統合の象徴であり、その地位が主権の存する国民の総意に基づく天皇のことを指す」と述べた。これまで政府は「君は象徴天皇と解釈するのが適当」との見解だったが、首相としては、主権在民という憲法の基本理念との関係を強調する文言を加えた新見解を示した。また「君が代」を憲法との関係で適当でないため「天皇の治世」「天皇の国」とは解釈せず、「日本国民の総意に基づく天皇を

日本および日本国民の象徴とするわが国」と解釈する。

政府の説明はまわりくどく、わかりにくい。「象徴天皇」に「国民主権」の修飾語を単にかぶせただけの君が代の「君」の定義は、いかにも未消化というほかない。どんなにたくさんの修飾語をつけたとしても、政府の見解としての君が代の「君」は「天皇」である。朝日新聞による世論調査では、君が代の「君」は象徴天皇を意味する、という政府の解釈をその通りだと思う人は50%、そう思わない人は40%である。世論は二分されている。

君が代のわかりにくさは君が代を英訳するときに明らかになった。外務省は君が代を外国にどう説明するかで困っている。これまでは外郭団体に作らせた英文資料の中で、「The Reign of Our Emperor」(天皇の治世)と説明してきたが、日の丸・君が代問題が再浮上した99年6月初め「不必要な誤解を呼ぶ」として資料の配布を中止した。しかし高村正彦外相は7月2日、「Ourは主権のある日本国民全体を指しReignは本来は君主の在位期間だが、全体としては天皇を国及び国民の統合の象徴とするわが国の姿といった意味にとらえられる」と答弁し、首相の新見解に沿うものとした。

敗戦まで「天皇は神」だった。しかし戦後、「天皇は人間だ」と明かされ、元首から象徴になった。いまさら君が代に託して象徴天皇を歌いあげる必要があるのだろうか。君が代の「君」を「象徴天皇」とすると定義すべきではない。「君」は天皇でも恋人でもあなたでもいい、歌う人の自由にすればいいと思う。意味をぼかしてこそ、広く受け入れられるような気がする。

3. まとめ

日の丸・君が代を法制化する法案は99年7月22日の衆院本会議で賛成403票、反対86票で可決された。他の重要法案と比べて格段に少ない13時間強の審議だった。そして、国旗・国歌法案は8月9日の参院本会議で賛成166票、反対71票で可決成立した。朝日新聞の世論調査によると、66%の人が今の国会での成立にこだわらず、議論を尽くすべきだと考えていた。審議にもっと時間をとって国民的合意を得るべきだった。法制化は、早すぎたと思う。あまりにも残されている問題が多すぎる。消費税導入も、ガイドライン法案の時も、国民の反対の声は立ち消えになった。国民のものであるはずの国旗・国歌は、国民が納得いくまで時間をかけて審議してほしかった。(参考文献省略)

本文は「少人数ゼミナールA」のレポートです。



夏休みフィールド・ワーク

御笠川の生態

法学部1年 ^{まつ}松 ^お尾 ^{ひろ}寛 ^{ゆき}之

はじめに

平成11年6月29日、博多駅を中心として広範囲にわたる水害が発生した。床上浸水724棟、床下浸水1339棟、死者1名という通常では考えられない災害であった。原因は博多駅の近くを流れる「御笠川」の氾濫である。1時間当たり80mmという記録的な降水と博多湾の満潮の時間が重なり、水は堤防を越えビル街へと進んでいったのだ。

この水害を聞いたとき、私は那珂川の陰にかくれて日ごろ全く脚光を浴びない「御笠川」という小河川に興味をもった。それは河川と水害という視点ではなく、川の流れを上流から下流まで探索し、歴史や文化、周辺の産業を含めた「御笠川の生態」をこの目でみてやろうと思ったのである。

また、この夏念願の車の免許を取得した。フィールドワークに欠かせない「足」が確保できたことも、このレポートの作成におおいにあずかっている。

御笠川の源流北谷・太宰府市

御笠川の源流は宝満山の西麓、太宰府市にある北谷にある。急峻な宝満山にふさわしく、細流ながら流れは速い。その溪流がはじめて出会う集落の名を「御笠」という。川は「御笠」を足早に通り過ぎ、太宰府の町並みを左手に見ながら進み、大野城市、福岡市を通過して博多湾に注いでいる。わずか20kmにみえない小河川である。川の名はこの集落「御笠」によるのか、現在の筑紫郡が昔「御笠郡」と称していたからなのか、その点はよく分からない。出発を前に昭文社発行の「福岡県広域詳細地図」を広げてみた。三条、観世音寺、朱雀、連歌屋と、いかにも古都太宰府にふさわしい地名が御笠川の流域に名を連ねている。そして上流にもかかわらず何故か川幅が広いのを発見した。観世音寺や太宰府政庁跡の目前を流

れる川である。「遠の朝廷」の大宮人が川遊びのために川幅をひろげたのか？ 早速出発だ！

やはり現地はのぞくもの。源流から2000m下った三条で「水門」をみつけた。なるほどこれが川幅を広くした原因か。川に作られた最初の建造物である。コンクリート製の井堰である。稲作用の田圃への取水口らしい。川幅4m、源流からわずか2kmでこの川幅があるのは考えてみれば当然のことで、水田への水の供給のためである。土手を新たに築いて川幅を広くし水量を多く確保したのだ。この工事は農地が減少し都市化が進む現代の作業ではない。米の生産量が飛躍的に伸びた江戸期か明治のころだろう（堰のコンクリートはもちろん昭和の工事）。

農家とおぼしき2,3軒に聞いてみた。この水門の名は「わく井手堰」。三条水利組合のものだという。水田のため6月から10月までポンプが稼働し、わずか2haの地を潤すという。三条水利組合にはもうひとつ井堰があり「小井手堰」という。これもポンプによる取水をしている。人家が多いとはいえまだこの辺りは宝満山と四王寺山にはさまれた谷間で、糟屋郡宇美町と筑紫野市を結ぶ県道筑紫野・古賀線が走っており、行き交う車が多い。

さて、御笠川は三条をはなれて五条に向かう。ここまで南行していた川ははじめて西に向かう。太宰府市の橋はすべて朱塗りの欄干、柱は擬宝珠ときまっているらしく、他の市町村とのエリアの判別がやさしい。

朱塗りの橋をみるたびに、ここはまだ太宰府市の領域だと思う。

地図で見ると、この南行する「御笠川」に流れ込む幾筋もの細流がみえる。また川の北斜面に13個の灌漑用の池を数えることができる。昔は太陽に南面するこの地が稲作の適地だったに違いない。ここでは直接水利組合長を訪ねた。2個の自動モーターで2haの田を潤してい



御笠川の源流

るという。稲の品種は「ヒノヒカリ」、1反につき約480kg、8～9俵収穫があるという。ポンプは間断灌水で大雨のときは給水をとめるそうだ。それくらい気をつけないと『根ぐされ病にやられ8～9俵という高い収穫はのぞめない』ということだった。太宰府市管内の井堰の中で通古賀水利組合の「前井手堰」が一番大型で立派だった。川幅約25m、電動の可動堰で『冬季は倒れて横になっている』。御笠川はこうして下流の水域をめざす。

水域の船越？

古跡「水域」の横で「船越」という地名に出会った。私が知っている「船越」とは読んで字のごとく『船が土地をこえるところ』。海の近くで「船越」という地名ならば、これはもう絶対に舟が陸地を越えていく場所だと思ふ。しかしここは舟を浮かべるにはあまりにも水量が少ない川である。川でそんなことがあるだろうか？ 川舟をどうやって走らせるのか。

広辞苑を引いてみた。『「船越」とは島や半島などで両側が海でその間の陸地がくびれて細くなっている所。舟を担いで越したからいう』。糸島の前原や対馬にも同名の場所がある。対馬のものは「小船越」「大船越」といい、舟を海から引き上げて斜面を越えさせ前の海に浮かべる場所だったらしい。「小船越」は今陸地が削られて運河となり、浅茅湾から三浦湾へ漁船が自由に行き来している。

しかしここは川幅狭く水量も少ない御笠川である。そんなことはないはずだが、もしや、と思ひ郷土史にくわしい筑紫野市の久芳康紀氏に聞いてみた。『明治のはじめ頃まで川舟が行き来していたと聞いています。船越の地名は井堰を越えて舟をひいた名残です』。

ショックだった。石炭を運んだ「五平太舟」の行き交う遠賀川ならいざしらず、こんな小さい川で川舟の交通手段があったとは意外や意外である。しかも100年前のことだという。気候もさほど変わらず降水量も同じだとすれば、この水量ではよほど御笠川の流れを管理しないかぎり不可能ではないか？ この水量では絶対無理だと思う。久芳康紀氏によれば、二日市と博多間の米の輸送が目的の水路だったという。

源流から河口まで一気に下ろ

うと思った企画だったが、ここ水域「船越」で挫折、川舟調査のため本流を逆行し、途中から支流の鷺田川に分け入ることになった。因みに「御笠川」には4本の支流が流れこんでいる。諸岡川、牛頸川、鷺田川、高雄川である。

御笠川は昔、舟が往来する重要な水路だった

「船越」から約3km上流の筑紫野市歴史資料館。学芸員に話を聞いた。

『江戸時代の福岡藩の上座郡、下座郡（現在の朝倉郡）は福岡城下より16里（約60km）離れていて、年貢の米を陸路で運ぶにはあまりにも困難だった。そのため有明海に注ぐ宝満川の水を二日市・高雄川に引き、これも同じ逆行する山口川の水を二日市・鷺田川に落とし、御笠川の水を増し、「浅舟」に米俵を積み二日市から博多まで「米」を運搬した。寛文4年（1664）、博多の姫路屋利右衛門、松原屋伝兵衛、宰府の芦屋作兵衛、秋月の坂口吉右衛門の4人が始めた』と記録にあるという。即ち、上座、下座の米を馬で二日市まで運び、一度米蔵におさめ、入舟（積立場）から一そうの舟に30苞を積んで博多まで運んだ。1苞の運賃は米7合と定められていた。この水運は日清戦争のころ（明治27年）まで続いたという。現在、西鉄二日市駅の近くに「入船」という地名があるが、これはその名残だという。

これで水運に必要な水量の謎は氷解した。しかし、逆流する筑後川系の宝満川、山口川の水を一部御笠川へ流したとは、よく考えれば大工事だったにちがいない。いつか二つの川を結んだ運河跡を見つけたいと思う。

御笠の名の由来が分かった・大野城市

支流鷺田川に別れを告げて再び本流にもどってきた。

御笠川はこの春完成したばかりの福岡都市高速2号線とつかず離れず平行して流れる。三郡山を遠くに望みながら福岡平野をゆっくりと蛇行している。その河畔、山田という集落に「御笠川」の名の由来を示す森があった。川のすぐ横に「御笠の森小学校」があり、名前にひかれてたずねると学校の名前になった「御笠の森」がすぐ近くに鎮座



川舟の発着所、筑紫野市入船

していたのである。回りを住宅街で囲まれて、森への入り口すらわかりにくい。森の中に入ると巨木が10本ほどあり、涼風が吹いていて別天地の趣があった。巨木の名は分からない。常緑樹である。社が鎮座している「鎮守の森」以外でこんな森も少ないのではないか。

「御笠の森」の名の起こりについて大野城市教育委員会が立派な看板を出している。それによれば、『神功皇后がここを通る途中、突然つむじ風が吹き、皇后がかぶっていた笠が吹き飛ばされて森の木にかかった。そこで人々はここを「御笠の森」と呼ぶようになった。この伝説によって御笠川や御笠郡など「御笠」と称する地名や川名がつけられた』という。この話は奈良時代の『日本書紀』が出典となっている。神功皇后そのものが伝説上の人物であり、そんなことも「アリ」かなと思ったが、さらに驚いたのはこの森が神功皇后の話を受けて万葉集の一首になっていることだ。

太宰の大監、大伴宿禰百代の和歌。

『念はぬを思うといはば大野なる

御笠の森の神し知らさむ』

小さな森にしては念のいったことだ。『日本書紀』『万葉集』に登場し、さらに貝原益軒の『筑前国続風土記』にも記載されているらしい。

案内板はさらに続ける。『この森は大野城市内では最大級に成長したスダジイやモチノキをはじめ、タブノキ、ヤブツバキ、ヤブニッケイ、カクレミノなどから構成される西南日本の代表的な照葉樹林の姿を残しています』。

大野城市が有形民俗文化財と天然記念物に指定したのがなんと4年前の平成7年だとか。随分おっとりとした対応だが、残っただけでも良しとすべきだろう。

河口に到着・福岡市

さて、「御笠川」は福岡市博多区の都心にはいる。まずは6月29日の洪水地点。2カ月たった今でも土囊が積まれたままで、新たな手は加えられていない。6月と同じ雨量ならば再び水は堤防を越え博多駅周辺に水害の爪痕を残すだろう。土囊の個所は二つ。これでいいのか。これから台風のシーズンが到来する。雨が降り始めてからでは遅いのだ。行政の対応の遅さが気にかかる。またマスコミはどうしているのか。事故がおきてから新聞やテレビ、ラジオで報じるだけなのか。事前に調査し報道するのもマスコミの使命だと思う。

帰宅して調べてみると「御笠川」は昔から度々氾濫

している。戦国時代、大友宗麟が博多を支配していた時代、何度も博多が水浸しになるので川の流れを変えろという大工事が行われたという。それが現在の石城町の横を通るコースになっている。

宝満山の源流から8時間、やっと河口に到着した。距離約20km、橋の数53、農業用水取水施設約20であった。川を下る途中、電話でお願いしていた「農業用取水施設」の一覧を、足を伸ばして福岡県農政部にとりにいった。所轄は農地計画課。こちらが用意した御笠川流域の農業についての質問には的確には答えてもらえなかった。

河口に立ってみた。川幅約250m、河口というよりは港の感じである。たしかに貨物船も停泊している。小さな源流を今朝見てただけに感激もひとしお、といきたい処だがあまりにも変哲もない小河川で、「こんなものか」というのが偽らざる心境である。



大野城市山田付近

おわりに

朝寝坊なのにこの日ばかりは早出のスタートとなった。朝霧の宝満山、北谷の清冽な溪流、御笠の森、どれもよかったが、小さな旅を終えて思うことは「御笠川」の流域は歴史の宝庫だということ。

日本の稲作はここからはじまっている。考古学上有名な「金隈遺跡」「板付遺跡」は川のすぐ横なのである。平清盛が築いた「袖の湊」、日本最初の禅寺「聖福寺」をはじめとするかずかずの寺院、石堂橋の袂にある「濡れ衣塚」など、「御笠川」を舞台とする歴史の話題は尽きることがない。

出発前は水を使った町工場などを探そうと考えていたが、これは全滅のありさま。結局、川に刻まれた歴史の旅になった。しかし弥生時代、第1号の稲作は御笠川の水が使われたことは間違いなことだと思う。

本文は「少人数ゼミナールA」のレポートです。



東を向きては清き多々良の流れに身を委ね

工学部2年 いけ だ のり ふみ
池田法史

ソフトテニス部には、現在現役生として男子16名、女子4名が在籍しています。そのうち男子10名、女子2名が2年生という偏った構成になっています。何とかこの状況を脱しようと常に新入部員を求めています。なかなか上手くいきません。学生のみなさんが「部」という名前に少なからず二の足を踏むということも分かります。けれども、私の知る限り「この部に入って失敗をした」という人のことを耳にしたことはありません。私自身もこの部に入って「たくさんのお話を学んで大きく成長できた」と思っています。練習は多少きついところがありますが、ソフトテニスが好きなお人にとっては十分やっていける程度です。



私たちの試合で最も重要かつ有名なのが七大戦です。この試合は、毎年旧七帝大が持ち回りで7月中旬に開催しています。昨年の七大戦では男女とも4位でした。今年は京都大学で開催され、優勝を目指しています。次に重要なのが、5月上旬に開催される全九州学生ソフトテニスリーグ戦大会です。これら二つの大会の前には合宿なども行っています。加えて福岡県内の私立、国公立大学でのリーグ戦にも参加し、全日本や西日本のインカレにも出場しています。

ソフトテニスのシーズンは、春から秋です。冬の間は基礎的な練習の時期です。これからの季節が、新入



部員も入りやすい時期となります。現在1年生が男女併せて3名で、来年や再来年のことを考えるとやはり寂しい感じがします。今入部すれば、全日本やインカレにも出場のチャンスが訪れるでしょう。

私たちは、試合前には毎週土曜、日曜、月曜、木曜日の夕方練習をし、普通の時には毎週土曜日に貝塚コートで練習をしています。見学や体験入部はいつでもできます。運動ができる服装で来ていただければ、すぐにコートで打つこともできます。コートの場所が分からない方などは、事前にホームページなどにその旨を書いていただければ迎えに行きます。

急に練習に参加することがためられる方は、12月上旬に開催されるソフトテニス大会に参加されるのも一つの方法です。この大会には、毎年寒い中たくさんの方が参加しています。今のところコートの傷みが多少ありますが、体育総務との交渉を続けて大会までには何とか直せるように努力しています。

最後になりましたが、ソフトテニス生涯楽しめるスポーツの一つです。少しでもソフトテニスについて興味のある方は、すぐにでも私たちのところへ訪ねてきてください。

ホームページアドレス rcweb2.rc.kyushu-u.ac.jp/~stc



留学体験略記

経済学部4年 ^{とう}東 ^{はた}端 ^{げん}玄

僕が留学していたRice Universityはテキサス州ヒューストンにある私立大学である。1912年に文学、科学、芸術に秀で社会に貢献できる人材を育成する目的で創設された。初代学長のEdger Odel Lovettはその設立に際し、世界中の高等教育機関を視察し理想的な大学建設のためのアイデアを集め、同時に教授の推挙を懇願して回ったという。そんなRice Universityの最大の特徴はなんといっても人と人との距離がとて近きことである。キャンパスを友人と歩いていて、会う人全てと言葉を交わす友人を見て驚いたものだった。しかもそれは教授学生皆に共通していた。それがRice communityとでも言うようなものを創り出し、結果大学がまとまって上手く機能する原動力になっているようであった。

最初のころはただ何をするにも時間がかかり毎日が忙しかった。予習と宿題に追われ土日も勉強漬けの毎日。それでも授業に追いつけないので夜中の三時四時まで勉強してやっと講義内容が理解できるようになった。そして遂には中間試験でAをとることもできた。嬉しくて仕方がなくてその日は答案を枕元に置いて眠った。しかし講義の理解はすべて友人のノートから。平日も週末も一日中勉強、そして肝心の英語は上達の無いまま。一つのことを全力でやれば何とかやっているが、本当はもっと広く様々なことを体験しに来たはずなのにというジレンマに苦しんだ。そこで後期は自分から積極的にいろいろな所へ顔を出して活動した。それから友人も増え英語もかなり上達した。

留学に際しては経済学、英語、そして空手をテーマに臨んだ。経済学部の授業は基本科目を中心に非常に体系的に構成され、学生にとっては学びやすかった。主に履修した応用ミクロ経済学は数学一色の講義で大変苦労したが、それまで九州大学では理論中心に経済学を学んでいたもので、数学的思考を取り入れたことで見方がよりバランスのとれたものになった。教授は教える事に対し熱心でその説明は丁寧で分かりやすく、講義はよく準備されており変な言い方が楽しめた。また教授達とは学問以外についても話す機会が多く、非常に貴重な経験ができたと思う。

本物の英語はこれ以上は無いと確信していたトフルのそれよりも圧倒的に速かった。食べ物の注文はできないし、会話では二の句が継げない、聞いて返ってくるのは知っている事だけ、いつも今一つが分からなかった。一ヶ月で緊張が解け、二ヶ月で音として聞き分けられるようになり、三ヶ月以降はもはや速いとも難しいとも思わなくなった。しかし本当に自然な感じで英語が耳に入ってきたのは留学も終わる最後の一週間になってからだった。教科書を見てパッと重要な部分が浮き上がって見えたり、返事も自然に口をついて出て来るようになった。十ヶ月間の英語に囲まれた生活の中で、自然と言葉の持つ語感や用法が身についたからだと思う。

日本人であることや留学生であることは直ぐに特別な事ではなくなり、自分自身は何者かと言うことを常に意識し表現していく必要に迫られた。英語が堪能でない自分にとって空手という表現方法があったことはとても幸いだった。みんなが自分を認識してくれるきっかけとなったからだ。後期には非公式の空手クラブを作った。キャンパス中にポスターを貼りまくり、Eメールで直接呼びかけて参加者を募った。食堂のオヤジさん、キャンパスポリス、大学講師、そして一般の学生など立場も人種も様々なユニークな面々が集まった。嬉しいのも束の間、練習を数回終えて残ったのはたった一人。しかし伝統派空手の有段者で、様々な格闘技に精通していた彼との二人だけの稽古はかなり有意義なものとなった。

人はGenと名前で僕を呼び、自分は「I」という単語を使いつつも自分の考えを述べる。外国語を通じ自分を表現していく事で随分自分の考えを意識するようになった。環境が変わり、新しい比較の対象を得て物事を中立的に考えられるようになった。勿論自分自身についてもである。留学以前の経験が留学を突り大きなものにしてくれ、留学で得たものは今現在の生活の中でより生きてきていると強く感じる。留学で学んだこと、得たものは計り知れない。皆さんも留学どうですか？



留学生生活を振り返って

文学部4年 しん たに な な
新 谷 奈 々

・ミシガン大学での留学生活

一昨年の8月26日、これから始まる新しい生活への期待と不安（90%は不安であったが）を胸に、アメリカミシガン州デトロイト空港に降り立った。空港では、前年JTW第4期生として九大で学んでいた友人が彼女の家族と共に大きな笑顔で私を出迎えてくれた。しかし、私の服装を見た途端、彼女の笑顔は驚きの表情へと変わった。私はあまりにも着込み過ぎていたのである。私の頭の中では「ミシガン＝極寒」というイメージしかなかったので、8月といえども日本の秋のような感じだろうと予想していたのだ。その予想に反し夏のミシガンは日本の夏と同じく暑かった。予想外のことであったので、結局私は着いて早々、半袖のTシャツやサンダルなど夏物を購入せねばならなかった。夏はこのようであったのだが、冬は私の予想を裏切ることなく非常に寒かった。雪は1m程積もり、空気の冷たさで顔中が痛くてたまらなかった。どんなに寒かろうが授業が休講になることはないのだから、慣れない雪道を用意しながら歩いて大学に通ったものである。その寒さにも慣れ、0℃あれば暖かいと思えるようになった時には我ながら驚いたものであるが。

さて、このような環境の中での留学生活であったが、予想以上に大変であった。授業についていくのが本当に大変なのである。私が取った英文学のクラスでは1学期（4カ月弱）でシェイクスピアの作品を9つも読まねばならなかった。中間、期末試験とは別に毎週レポート提出が課された。英語力不足のせいもあり、本当について行くのに必死であった。そのため、平日は授業の他に1日6時間程勉強、金曜の夜と土曜はパーティーへ行くなどして息抜きし、日曜は次週の予習や宿題など1日中勉強、というのが私の1週間であった。留学の感想を尋ねられるといつも「勉強を頑張った。」と胸をはって答えている。それくらい本当に勉強した8カ月だった。今考えればもっと遊んで勉強以外のことにもっと触れるべきだったと少し後悔しないこともないが、遊びと勉強のけじめをきちんとつけ、これだけ一生懸命勉強することができたことは、私に大きな

自信を与えてくれた。あれだけ頑張れたのだから、どんな困難なことがあっても何とか乗り越えることができると思えるようになった。英語力や世界各国からの友人も留学で得ることができた貴重なものであるが、自信というのも私にとって大きな収穫であった。

・九州大学への提言

ミシガン大学での私の経験、そして同時期に他大学へ留学していた九大の友人達の経験から、九大をよりよい大学へとするための提言をいくつかさせていただきたい。まず第一に教官と学生との距離について。これはアメリカの大学に派遣されていた学生全員の意見であるが、あちらでは教官と学生との距離が非常に近かった。このことにより学生の学習意欲も向上する。私自身、教官が私のことを気にかけてくださっていたので、期待に応えねば、と頑張った覚えがある。九大でも、クラスの少人数化やEメールを質疑応答や意見交換の場として活用するなどして教官と学生との距離を縮めることができれば、学生の向学心も伸びるのではないかと思う。また、あちらの大学では当然である学生による教官・授業の評価を全授業で取り入れていただきたい。これは授業の質のみでなく、学生の学習意欲の向上にもつながるはずである。さらに図書館を24時間利用可能にするなど、勉強しやすい環境づくりも学生の意識改革を進める上で必要であろう。

第二に障害者に対しての大学のあり方について述べたい。ミシガン大学では全ての建物にスロープ、エレベーター、ボタンで開くドアそして車椅子の方用のトイレが設置されており、障害のある学生も他の学生と同等に学習できる環境が整っていた。これはワシントン大学などでも同様のようである。これに比べ、九大では障害者への対応がまだ十分であるとは言えないと思うので、容易なことではないと思うが、是非改善していただきたい。

最後になるが、この素晴らしい機会を与えて下さった九大の先生方、留学生課の方々、そして留学を認めてくれ、どんな時も私を支えてくれた家族に心から感謝している。



ドイツでの出会い体験記

理学部2年 ^{むら}村 ^{かわ}川 ^{ひろし}寛

[...] いよいよドイツ南東部のアメラングでのホームステイが始まった。アメラングは人口3000人の小さな村なのだが、田舎という印象は受けなかった。ホームステイ先には11歳のトーマスと9歳のカトリーヌと3歳のアレクサンダーという3人の子供たちがいた。まず私が感激したのは歓迎の言葉と絵が描かれた紙が寝室の扉に貼ってあったことだ。それはカトリーヌが作ったもので魚がたくさん描いてあった。それは家の金魚を見て描いたようだが、型にはまっていない彼女独特のデザインだった。家は地上3階地下1階の大きな家で、子供たちはそれぞれ各自の広い部屋を持っていた。家はしっかりした木材とコンクリートの頑丈な造りで、窓が多く室内はとても明るかった。部屋も階段も広く、子供たちが家の中で走り回ったり運動したりできるようになっていた。また地下には卓球台があり、トーマスと試合をしたりした。学校は昼までに終わるので、子供たちは自分の時間がたっぷりある。ママはシチューやイチゴケーキなどのおいしいごちそうやお菓子を作ってくれたり、パパは休日にはザルツブルクまで連れて行ってくれたり、子供たちは私たちに皿を運ぶなど手伝いをして、私たちを家族みんなが心を込めてもてなしてくれた。それに対して私は感謝の気持ちを自分の感じたままに表現したかったが、適切な言葉が思い浮かばず、決まり切ったお礼の言葉しか言えなかった。しかし彼らにその気持ちは伝わっていると思う。今回残念だったのは、話そうとしても文を一つ考えるのが精一杯で一つのテーマについて会話を続けることができなかったということだ。パパやママはそういう私たちのもどかしさを理解した上でこちらの考えていることを押し量りながら楽しく話しかけたり聞いたりしていた。ホームステイが始まるまでは子供たちとどうつきあっていこうかと思っていた。しかし、広場でのサッカーや室内での卓球やゲーム、折り紙、ローラースケートなどをして子供たちと遊ぶ機会がたびたびあって、すぐに親しくなった。子供たちとゆっくりと話すことはできなかったが、一緒に遊ぶことで心が通い合った！

さらにアメラングで印象に残ったのは隣近所とのつ

ながりが強いことだ。パパもママもアメラング生まれのアメラング育ちで、村には子供の頃からのつきあいのある人が多くいる。この家でパーティーが行われた時、パパ、ママの親戚や、私たちの団員の一部、団員のホームステイ先の家族を含め50人近くが集まった。人数が多いのに驚いたが、この家はその人数を見事に収容した。リビングではハーブやギターの演奏もあり、地下では卓球が行われ、にぎやかな会は真夜中まで続いた。日頃も気軽に人を招いてお茶を飲みながら談笑していた。また、ママは2日おきくらいにパンを買いに朝早く出かけるのだが、その際に隣の家の分も買ってきて、その人たちがまだ起きていないため、玄関の取っ手に袋に入ったパンを懸ておく習慣があった。さらに子供たちの友達関係も広く、毎朝カトリーヌを小学校の友達が3人で迎えに来てくれるのが日課になっていた。このように、近所とのつきあいが親密で、この村の子供たちはいろいろな家庭から見守られ、たくさんの大人または友達から人間関係のルールなど多くのことを学びながら育っている。

ドイツで生活する間、一月とは思えないほど数多くの発見、出来事があった。今回の研修旅行ではドイツ語で話したり聞き取ったりは十分にできなかったが、現地の人の思いやり、親切心にふれることができた。私が出会ったドイツ人から受けた印象は、飾りがなく、誠実で、感受性に富んでいて表情が豊かであることだ。この旅行で今まで一万キロの彼方で別々の生活をしてきた者同士がめぐりあい、ともに楽しい時間を過ごし、友情や信頼感を育むことができた。この人たちと知り合い、心を通わすことができ自分は本当に幸せだと思った。これからも手紙を通じて親睦を深めていこうと思う。実際にドイツの人と話して、自分のドイツ語がまだまだ未熟であることを痛感する毎日であった。自分の言いたいことをドイツ語で表現できるような語学力を身につけたいと思った。ドイツ語を学ぶ新たな意欲が湧いてきた。

(「第16回ドイツ語とドイツ文化研修レポート集」から抜粋)



ケンブリッジ語学研修レポート

教育学部3年 ^{いの}井 ^{うえ}上 ^{くみこ}久美子

今回のケンブリッジ語学研修は、生涯忘れられないほどの大変素晴らしい体験となりました。今でも写真を見るたびに、ペンブロックカレッジでの学校生活が鮮明によみがえります。

海外に出ること自体が初めてだった私にとって、出会うことを見ること何もかもが初めてで新鮮でした。まず最初に感じたことはイギリスの人々の雰囲気や生活スタイルの相違です。イギリスでは日本に比べて、自由で何か時間がゆっくり流れているような印象を受けました。どの店も大抵17時すぎに閉まるし、特にケンブリッジにおいては、日本では至る所に見受けられる24時間営業の店は一つもない。それでいて人々は不自由している感じが全くしない。またレストランに目を向けると、昼間からビールを飲んでいる姿があらゆる年齢層で男女問わず見られる。日本では大活躍の携帯電話を持っている人はごく少数。イギリスへの先入観も加担してではありまじょうが、それにしても実際にイギリスの人々を観察してこのように感じざるを得ませんでした。

第二に印象に残っていることは、ケンブリッジの由緒あるカレッジの数々、美しく保持されている緑の素晴らしい景観です。実はケンブリッジに着くまでは、カレッジが36もあることやヘンリー8世のような歴史的に有名な人物が大いに関与していること、またそれほど有名なカレッジが数多くあることなど全く知りませんでした。だから日本の大学とあまりにもスケールの違うこれらのカレッジを目にしたとき、その壮大さに圧倒されたと同時にそのような場所で学ぶことが出来ることは大変羨ましいと感じました。また、ペンブロックカレッジはもちろんのことキングズカレッジやクィーンズカレッジ、トリニティカレッジやセントジョーンズカレッジなどのレンガの建物や芝生、チャペルなどはまるでTVの世界紀行を見ているかのような気分になりました。そしてカレッジ以外でも、パークピースのような緑一面の広場は日本では滅多に見られません。あの広場で大の字になって寝転がったことは、簡単なことの様で実はとても貴重な体験だっ

たと思います。日本にもあのような誰でも気軽に使用できる憩いの広場があれば、ストレスフルな現代の子どもたちの遊びも変わってくるのではなからうかという印象を受けました。

第三に、大変充実した一カ月の授業は最も印象深いことでした。私のラングイッジクラスはDクラスで女の子だけの9人のクラスでしたが、クリス先生が私達一人ひとりの能力をよく配慮して下さったので、話される多岐に渡るトピックを大変よく理解することが出来ました。また時折ゲームやツアーなどのエンターテイメントも織り交せてくださり、決して受け身ではなく、教師と生徒の距離が近い一体となった授業をして下さいました。建築のコースの授業も、講義だけではなく実際に現地を訪れて、さまざまな建築物をみる事が出来ました。英語で話される授業についていけるのかと初めのうちは不安でしたが、先生方の親切で分かりやすい授業のおかげで、自然に聞き取る能力を伸ばせたように思います。

チューターの三人との思い出も大変大きいものとなりました。三人とも本当に常に私達のことをよく考えてくれて、映画からバーベキュー、パーティーに至るまで様々な体験をさせてくれました。そしてその態度は一カ月間全く変わることなく、私達のために尽力してくれました。イギリスで出来た貴重な友達をこれからも大切にしたいと思います。

この研修は自分の人生観や世界観について考える良い機会となりました。日常とは全く異なる環境に一カ月間暮らし、様々な刺激を受けることによって、これからの進路や自分自身の生き方などのもやのかかった部分が、かなり見えてきたような気がします。また、ケンブリッジから離れロンドンやブライトンなど自分たちだけで行き当たりの英語で旅できたことによって、自分自身への大きな自信になりました。今回の語学研修で感じたこと、達成できたことなど思い出の一つひとつ大事にしなが、これからの自分の人生の糧にして英語はもちろんのこと、色々なことに積極的に励んでいきたいです。本当にかげがえのない一カ月でした。



韓国の伝統芸能・パンソリ

シン チュン キュン
申 忠 均

映画「風の丘を越えて／西便制」

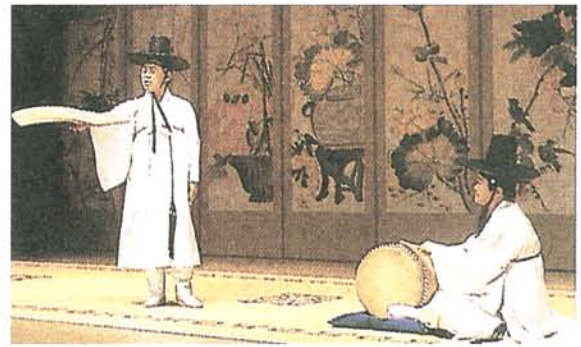
流行りの国際化という言葉が象徴するように、日本中の人々の目が世界に向いている昨今、アジアへの関心も高まっているように思える。韓国への関心も高揚しており、サムルノリなどの伝統芸能の公演なども盛んに行われている。一昔前までは、韓国文化というと、博物館でしかお目にかかれない文化財などを思い出しただろうが今は違う。伝統文化だけではなく、現在進行形の芸術、大衆文化にも耳目が集められている。特に韓国映画に注がれる暖かい眼差しには、驚かされるほどである。去年封切られて、韓国全土を賑わせた「シュイリ」が、今年のお正月に日本で公開されるそう。映画には門外漢であるが、このような韓国映画への関心の火付け役は、韓国を代表するベテラン監督イム・グォンテク(林権澤)さんの「風の丘を越えて／西便制」(原題「西便制」)ではないかと思う。



映画「風の丘を越えて／西便制」は、イ・チョンジョン(李清俊)さんの連作小説「南道の人」のうち、「西便制」・「歌の光」・「仙鶴洞の旅人」の3作を基に作られたものである(後に、作家のイさんと監督のイムさんは共同作業で、「祝祭」という小説と映画を同時に発表している)。映画「西便制」はパンソリを歌う旅芸人の親子を通して、ハン(恨)とソリ(歌)、抑圧と芸術の関係を克明に描いているものである。映画の内容は、日本語字幕付きのビデオがレンタルショップなどで入手できるので、直接見てもらうことにし、以下「西便制」の題材であるパンソリをご紹介します。

パンソリとは

「西便制」に登場する旅芸人とは、パンソリの歌い手である。このパンソリというのは、一人のソリクワンデ(芸人、唱者)がブク(鼓)を打つコース(鼓手)一人の手助けで、長い叙事的な話を、ソリ(歌)にアニリ(話)を織り交ぜ、パルリム(仕種)で盛り上げながら口演する伝統芸能である。



パンソリという言葉の語源と意味については、二つの説がある。「多数の聴衆が集まった遊びの場(パン)で歌われる歌」という説と、「変化に富んだ楽調(パン)で構成された歌」という説がそれである。パンソリが多数の聴衆が集まった場で演唱される現場芸術であり、話の流れによって多様な楽調とリズムを用いて行われる音楽である点で、二つの説はそれなりの説得力を持っていると言える。

パンソリの歴史と流派

朝鮮には、祭りの性格も持つ、村を挙げての儀式であるマウルグッ(村祭り)があり、その中には音楽、踊り、劇、曲芸などのパンノルム(広場遊び)があって、パンソリはその一部として演じられたが、パンノルムがマウルグッから独立するようになってからは、他の芸能を押さえ一番の人気を博し、独立した芸能形態に発展するに至った。

19世紀には、発生期の民衆のパンノルムとしてだけでなく、支配階級のヤンバン(両班)のパンアンノルム(お屋敷遊び)にまで浸透することになるが、これによって、パンソリの詞章と音楽は民衆的で単純・質朴な性格に、貴族的で優美・学術的な要素が加わり、複合的な形に発展していくことになる。

しかし、19世紀末大韓帝国の国運が衰えてくるとともにパンソリも衰退の道を辿ることになる。日本の植民地時代には、演劇的な要素が強調された、多人数によるチャングク(唱劇)が流行ったが、パンソリのソリクン(唱者)もこれに流され、パンソリ衰退を加速させた。

現代に入ってから、1960年代にパンソリが重要無形文化財としての指定を受けるなど、復興運動が起った。今は特に大学などを中心に伝統文化への関心も高まっており、近代初期に録音された、ミョンチャン(名唱、芸の優れている唱者への尊称)の古い音盤からの復刻や、今活動中の人間文化財(人間国宝)のパンソリの収録なども盛んに行われている。これからの発展も願いたい。



パンソリが伝承された地域は、主に全羅道(チョルラド)・忠清道(チュンチョンド)の南部と京畿道(キョンギド)の南部であるが、長い歴史の中で地域的特性と伝承系譜によっていくつかの流派が生まれた。全羅道東北地域のソリをトンピョンチェ(東便制)と言い、全羅道西南地域のソリをソピョンチェ(西便制)と言い、京畿道・忠清道のソリをチュンゴチェ(中高制)という。

東便制はウチョ(羽調)をふんだんに用いており、重厚なリズム感がその特徴とされる。西便制はケミョンチョ(界面調)を好み、軽くて精巧な感じがする。中高制は東便制に近く、古風で質朴なところが特徴的である。

ここでいうチョ(調)と言うのは音楽の旋律のことである。それには、悲しさを感じさせるケミョンチョ、明るく平和な感じを与えるピョンチョ(平調)、重厚感のあるウチョ、軽快さを特徴とするキョンドゥルム、逞しさが前面に流れるソルロンチェ等があるが、これらは様々な劇的状況によって使い分けられており、パンソリの音楽性を高めているといえよう。

パンソリの文学的特質

パンソリの詞章はサソルというが、その骨格の殆どが伝承説話などで構成されている。パンソリの伝承歴

史を通して、ソリクンは伝承説話の骨格に特に興味深い部分を拡張・敷衍(ふいん)することで詞章を発展させてきた。このように既存の伝承部分に添加された、文学的・音楽的に新しい部分をトヌムという。現存するパンソリ(チュンヒヤンガ(春香歌)、シムチョンガ(沈清歌)、フンボガ(興夫歌)、スグンガ(水宮歌)、チョクピョクカ(赤壁歌)のタソンマダン(五歌))は、これらのトヌムの集大成とも言える。

パンソリの登場人物は、とても多彩であり、生々しい現実性を持っていることが多い。舞台空間は概ね当時の生活を反映する生活空間か、それを寓話的に投影した空間であり、登場人物も虚構化された才子佳人ではなく、凡人である。なお、彼らが優れた能力を持っている良い人であっても、完璧な英雄として描かれることはなく、時に風刺(ふうせい)・嘲弄(ちょうりやう)の対象になったりもするのが興味深い。また、否定的なイメージの人物だからといって徹底的に悪の表象のように描かれることもまずない。これらの人物像の特徴として、封建的な隷属関係にありながら主君の偽善と弱点を暴いたり弄んだりする人物の存在が発達しているところや、平民層の人物群像が鮮烈なほど具体性を帯びているところなどを挙げる事が出来よう。

パンソリサソルは韻文と散文が混合した叙事文学であり、多層の聴衆を対象にしたものの累積であるが為に、その文体と修辞はとても多彩に富んでいる。優雅な漢学調の部分があるかといえば、ふざけた語りや露骨な俗語も登場する。音楽的にも、巫歌・民謡などが用いられている一方、悠長なヤンバンのシジョチャン(時調唱)も歌われている。また、これらの文体は登場人物の身分・性格・雰囲気・唱者の態度などによってがらりと変わったりする、いわゆる文体の分離という傾向性を持つ。

上記のパンソリの歴史からも想像できるが、パンソリの社会的性格・社会意識は一定ではない。19世紀以前までは平民聴衆の影響力が圧倒的だったので、中世的倫理意識と価値は嘲笑の対象として描かれ、平民の生活経験を基にした世俗的現実主義などの民衆の世界観と美意識が主流を成しているのはごく自然であると言えよう。この性格は、19世紀以降ヤンバンが聴衆の主要顧客になるとともに一部修正もしくは弱化されることになり、その結果パンソリには表面的主題と裏面的主題の間の葛藤という両面性が現われる例が多く、それは現存するタソンマダンに著しい。

(非常勤講師・朝鮮語)



「少人数ゼミナールA」を担当して

ね もと みち や
根 本 道 也

はじめに

九州大学では平成11年度から「少人数ゼミナールA」という授業科目が新設され、名誉教授が担当することになった。この科目の趣旨は、入学したばかりの学生に「研究の基本姿勢」、すなわち調査の仕方・資料のまとめ方・発表の仕方・討論の仕方などを身につけさせることだという。

大学入学前の勉強では教師から与えられたものを覚えるだけでよかった。しかし大学での勉学は知識習得を終局の目的とするものであってはならない。むしろ自らの意欲に発した能動的取り組み・独創的発想・自主的判断と解決能力こそが重視される。

大学に入学したばかりの1年生は受験という高山を越えてきたばかりで、いまだ目前にそびえる高峰が視野に入っていない感じだ。一息ついたら新たな気力をもって目前の高峰に挑んでもらわねばならない。登り口までは道案内も必要であろう。励ましの一言もかけてやりたい。

ゼミナールの実施経過

私の専門分野はドイツ語・ドイツ文学だが、「専門を教える科目ではない」ということなので、窮余の一策「暮らしの中の環境保護」をテーマに掲げて、「研究の基本姿勢」と「総合的思考能力」の養成を目指してみようと思った。環境問題については私も受講生も素人である。しかし素人であっても、地球住民の一人として積極的に関心を寄せ、かつ行動を起こさねばならない問題である。学生と教師がこの一つの問題について共に思考をめぐらし、調査し、討論してみようというわけだ。

ゼミはざっと以下のような流れで進んだ。

1. 最初に「環境保護」と聞いてまずどんなことを考えるか、自由に意見を述べあった。
2. 前回のフリートークの中から自分が最も興味をひかれる問題を選び、これから調査するテーマとその調査方法について各自の計画を発表し合った。さらに各計画について相互に参考意見を述べ

合った。

3. 調査に2, 3週間かけることにし、その間に、環境先進国ドイツの環境政策の実態やミシガン湖のダイオキシン問題のビデオを鑑賞し、諸種の現象について討論した。特にドイツでは官民一体となって徹底した環境保護政策を推進していることに目を見張った。これを糸口にして新たに気付いた問題点について討論した。
4. 次に3回にわたって調査の中間発表をした。司会も学生が交互に行った。調査には主として図書館やインターネットが利用されたが、中には市役所や発電所へ出向いた者もいた。中間発表は思い通りにいかない者が多かった。調査不十分な点については鋭い質問が飛び、発表者はさらなる調査を約束せざるをえなかった。
5. 最後の4回は本発表に当たった。一人につき発表20分、質疑応答20分とし、司会は交代制。各発表の直後に、以下の項目について相互評価をしてもらった。
 - I 調査 (a)調査の程度
(b)調査資料の分析・整理
 - II 発表 (a)言葉の明晰さ
(b)発表態度
(c)論旨の分かりやすさ
 - III 内容 (a)問題性のアピール度
(b)自分なりの見解

以上の各項目について評価リストにA B C Dのランクを記入してもらい、集計結果を今後の参考のために本人に渡した。

教師の印象

学生たちの関心は身の回りの「排水」「廃棄ガス」といった現象から始まって、しだいに地球全体の問題へと広がっていった。受講生9名がそれぞれ異なる切り口から調査し、発表し、皆で討論しているうちに、この問題の深刻さがひしひしと分かってきた。思えばこの50年間、日本は敗戦のどん底から驚異的な復興を

成し遂げ、未曾有の豊かな暮らしを享受できるようになった。この豊かさの中で生まれ、それを自明の理としていた学生たちにとっては、この豊かさの裏の実態を覗く機会となった。一つの専門分野が、精神の世界も含む大自然の摂理を顧みず、一つの利益を求めて突進するとき、その先にどれほどの危険が待ち構えているかを学生たちは感じ取ったと思う。

これを縦糸とすれば、それに織り込む横糸は次のようなものだった。

- (ア) 何かに情熱をもって取り組む。
- (イ) 自分の考えを熱意をもって発表する。
- (ウ) 人に正しく理解してもらうには、何をどのように調査し、論旨を整え、文章に組み立てればよいかを体験する。

結果的に見ると、(ア)は期待通りだったが、(イ)に関しては、特に初めの段階では刺激と後押しが必要だった。「無言と受動的姿勢」は入試の在り方と無関係ではなさそうだ。(ウ)は皆初めての経験だったので悪戦苦闘していた。しかしこの種の悪戦苦闘は早い時期に体験しておいた方がよい。

受講生の感想

受講生の側ではどう受け止めたであろうか。

感想例

「このゼミは、受けている科目の中で一番やる気の出たものだった。自分の興味あるものを選べたので、とても積極的に勉強できたと思う。先生も、問題を提示することは多々あったが、それに関する答えははっきりとは出されなかった。おかげで苦労もしたが、自分なりに深く考えることができて、かえってよかった。このゼミで一番よかったのは、自分でどうやって調べものをするかの方法が身についた点である。周りの人もなかなか行動力のある人が多く、かなりの刺激を受けた。このゼミは、これからの学生生活や、その後にも役に立つことであろう。」

今後の展望と課題

(1) フレッシュマン教育の大切さ

大学入学直後はどの学生も新しい世界へ入った喜びと将来への希望に胸を膨らませている。その喜びと希望が大方の場合、2、3か月もすると無感動と失望へ変質していく。これは見過ごせない現象だ。九州大学に入学すること自体を目的としていた者は大学生の名にふさわしい目的を見いだすまでに2、3年かかっている。

入学して間もない時期の無気力ぶりを傍観するか、あるいは積極的に「研究に対する希望と喜び」へとつないでやるか、これは重大な選択だ。後者の対応がうまくいけば、いずれ優秀な大学院生が続々と生まれるであろう。大学院の増設が進むにつれて、大学院生の質の低下を嘆く声が大きくなりそうだが、「嘆くエネルギー」を「育てるエネルギー」に変える方がはるかに得策である。大学院生の供給源を他に期待するのではなく、自分たちの手でゼロから育てる努力が必要だ。そのために名誉教授が役立つなら大いに活用してもらいたい。名誉教授だけでなく、現役教授の活用も期待できるのではないだろうか。

(2) 総合的思考能力の養成

私たち現代人、中でも先進国の人間は、ひたすら「便利・快適・速度・威力」を推進する物品の生産に最大の価値を置いてきた。そもそも一つの物を生産することはそれ自体単独では存立しえず、必然的に周囲の諸事象に影響を与え、かつ影響を受ける。そして未来に未知数の影響を残す。この厳粛な事実を忘れるほどに生産に夢中になり、その結果子孫に大きな負の遺産を残すはめになった。問題の解決を託された若い学生たちにはぜひ「総合的な思考能力」を身につけてほしい。その意味で、このゼミナールが学部の壁を取り払って行われる点を大いに評価したい。総合大学の利点を活かして様々な専攻の学生が意見を交し合う場をあらゆる形で育てていきたいものだ。

(3) ゼミナールの発展のために

「少人数ゼミナールA」は新設科目だから、いわゆる「操作マニュアル」がない。どの担当者も暗中模索で授業を進められたと思う。しばらくは実施方法について情報交換をし、うまくいったケースの実例をいくつか記録しておけば、お互いに気苦労も少なくなるであろう。また、今後新たに参加される先生もやりやすくなるであろう。

専門とは無関係にテーマを選ぶのは、慣れないせいか苦労する。2コマ担当する場合は一つはやや専門分野に関連づけてもいいということになれば、テーマ選びも楽になるであろう。

時間割の空き場所を利用しているせいか、受講者数の片寄りが大きい。この点は教務掛による学生への情報提供と交通整理で改善できるのではないだろうか。

(九州大学名誉教授)



「歩き、み、ふれる歴史学」

はっ とり ひで お
服 部 英 雄

本学に赴任して六年になる。この間、「歴史と異文化理解A」「歴史の認識」「歩いて歴史を考える」「農村、山村を歩く」「中世の村と人々」などの授業科目を担当した。コアは共通シラバスに従うが、プラス担当教官の個性を加味してもよいとされている。コア科目、個別教養科目、いずれにおいても学生諸兄姉とともに、かならず現地調査を行ってきた。

近年は体験学習、野外学習の重要性が指摘されている。わたしの所属する比較社会文化研究科はその学問研究の柱にフィールドワークをあげている。そこで全学共通科目においてもフィールドを実践している。

現地調査を通じて、

「教師は教壇の上にだけいるのではない」

「真の学問は大学の研究室の外にある」

このことを強調してきた。

現地に行って何を調べてくるか。学生がはじめて聞き取り調査をする場合、何らかのマニュアルも必要だろう。調査はマニュアルにしたがって行われる。地名、水利慣行、むかしの村の暮らし……調査項目は多岐にわたっている。現地調査が成功するか否かの鍵は、村のことに詳しい古老に巡り合えるかどうかである。

現地調査は学生たちにはどんな教育効果があるだろうか。農村には後継者がいない。だからこのままなら日本からはまもなく農村はなくなる。こんな分かりきった事実の認識も、当事者のことばから聞くのと、知識としてのみ知るとでは、全然違うのではないだろうか。村にガスもなく、炊飯器もなかった時代にどうやって食事をつくり、風呂を沸かしたのか。自然と共生し、貧しくはあったが、支出も少なくすみ、公害もなかったかつての村々の暮らし。その認識をうるだけでも、生きた知識になる。忘れてしまう知識を詰め込まれるよりは大切だ。もちろん優れたルポルタージュを書く訓練にもなる。

調査の時に録音テープを採ってきてもらう。ずいぶん楽しそうだな。学生側は尋ねる項目にとまどってすらすらとはいかない。でもおじいさん、おばあさんたちは若い学生とむかしの話をするのがうれしそうだ。

むかしの若者の暮らしについて聞く項目もある。話が弾んでいたなら、若者の恋についても尋ねてみようとなっている。案外にヨバイの経験者が多い。この手のはなしはふつうは男性のみがいる場での武勇伝になるのだが、ある学生は老夫婦が一緒にいる場でその話を聞いた。「わたし、そがんな話し、初めて聞くよ」。奥さんも知らない話が聞けた。

調査のしっばなしはよくない。そう思ってこの頃は学生レポートのコピーを世話になった古老に送ることにした。量が多いので送る作業だけで二日かかった。そうしたらなかに返事をくださる方がおられる。たいていはある程度はめてくださるが、間違いを厳しく指摘される方もおられる。過日電話があった。「この村に電気が来たのは昭和50年と書いてあるが、わたしが生まれたのが大正13年。それ以前にはもうきていました」。学生は昭和50年には生まれていなかったから、そのあたりの感覚が分からないのだろうか。半分笑い話である。その方に村の地名を聞いてみたら、たいした地名はないと謙遜しておられたが、5分後にまた電話があって、多くの地名を教えてくださいました。その地名は学生レポートには記述のないものだった。分かり切ったことなのだが、調査の充実を期するには一回限りではダメである。しかし再調査にしてみると、その方が入院中であえないこともある。亡くなっておられることもある。まさしく一期一会だ。

学生のレポート全文を公開したい。この希望は案外早く実現するだろう。ホームページに掲載すればよいのだ。それでレポートも電算入力してもらっている。

貴重な調査情報のうち、聞き取った地名だけでも、早く地図にして刊行したいと思い、ここ数年努力している。しかしレポートの不十分なところを再調査していると、どんどん時間がなくなっていく。4年前までに調査した分、平成6～8年頃に調査が終わった地域の分、佐賀平野の分を、まず本にして早く刊行したい。そして調査に参加した卒業生や学生たちと一緒に盛大に出版記念パーティーをしたい。これが夢である。

(比較社会文化研究科)

九州大学公開講座

「超」学問のすすめ

九州大学言語文化部

今日、大学は知の細分化と多様化という問題に直面しています。日々新たな知の対象が生まれ、これを研究する「ニュー」サイエンスが誕生しています。このようないわば新参の学問に対し、これまで大学はつねに寛容であったとはいえません。……。大学という権威を恃みにできない以上、それは教師と学生、教える者と教わる者との境界を越えるでしょう。すなわち、「超」学問がめざすのは、学生たちとともにあらたな知の想像を楽しむことなのです。……。(講座パンフレットより)

[[超]学問のすすめ]

森 茂太郎

本講座の開講講義に代えるに、コレージュ・ド・フランスにおけるロラン・バルトの開講講義をもってした。もとよりこの講座の企画者に、コレージュ・ド・フランスの華麗なる講師陣と張合おうなどというつもりは少しもない(とんでもない)。それでも本講座の幕開きにバルトの開講講義を援用することにしたのは、まず第一に、構造主義を中心とする現代思想の入門書として、これ以上コンパクトに要領よくまとまった文章は他にないからである。第二に、バルトのこの文章は、あらゆる意味で既成の学問の枠組みを乗り越えようとする本講座の趣旨によく適っていたからである。たとえばこの講義の冒頭、バルトは伝統的な弁論術のトポスをそのまま踏襲している。こうしたトポスを使用することによって、彼はコレージュ・ド・フランスの講師就任という晴れがましい役割をそつなく演じている——一見、そう見える。が、たかがバルト、されどバルト。やがて不思議なことが起る。講義が進んで行くうち、開講講義という儀式張った場が、いつのまにかその儀式性を失ってゆく。教師が教師でなくなり、教室が教室でなくなってしまう。そう、あのイヨネスコの芝居『授業』のように。言うまでもなくバルトは、このようにして彼の考える「文学」、「ときに権力の外」の言葉を洩らす」という「文学」を身をもって実践しているのだ。学問という一つの制度がいかにして「権力の外」の言葉を聞かせうるか、言いかえれば、学問がいかにして「文学」たりうるか、それこそバルトのひそみにならうれば、私たちが企画したこの公開講座の「根本的な企て」にはほかならない。尚、この開講講義では、受講生の大半を初学者が占めている事情を考慮して、エクリチュール、シニフィアン、コード

などの基本的な用語についても解説した。

[映画学]

阿尾 安泰

映画を見るということは、思ったほど自然なことでも簡単なことでもありません。私たちが映画を当たり前のようにして見られるのも、既に映画の見方を覚え込んでいるからです。そうした学習を経た後では、未知の外国語の映画に出会っても、それが映画である限りは理解はそう難しいものではありません。逆に言えば、そうした技術を習得しなければ、いくら画面を注視していても、メッセージを読みとることはできないでしょう。映画とは知識の獲得を必要とする文化的装置なのです。

では、そうした映像文化の配置の中から映画を考えていきましょう。映画は現在様々なメディアとの共存関係の中にあります。映画の独自性を考える中で、北野武の存在は重要です。彼はテレビと映画の両方の世界に身を置き、別々の名前を自己に付与することで、活動に違いを見いだそうとしているからです。

北野武は映画において、この映像技術が行ってきた語り方を問題にしていけます。映画において多様であるべき語り方がいつしか限定されていき、その縮小化が洗練の過程と誤解されていく中で、映画が独自の可能性を喪失していくことを問うのです。北野のこうした姿勢は、観客に映画を見るという行為について考えることを要求します。映像から物語を構成するという、これまでに意識化せずに行ってきた活動が捉え返されることとなります。その時映画の持つ制度性が明らかになるでしょう。私たちは自由に映画をみているつもりで、その装置の配置の探究の中から、映画の別の可能性が現れてくるのではないのでしょうか。

[アニメ学]

岡野 進

座長の森さんから頂戴したお題は「アニメ学」であった。そこで講義の三分の一はアニメを観てもらい、残された時間でアニメについて話そうとプランを立てた。アニメは「風の谷のナウシカ」, 「甲殻機動隊」, 「エヴァンゲリオン (テレビ版)」の3本を選んだ。今売り出し中のアズマ青年のテーゼ——日本の80年代のアニメーションは「エヴァンゲリオン」で完成されると同時に解体された——を検証してみたかったからである。

日本のテレビアニメは周知のように「鉄腕アトム」から始まる。しかし、「アトム」は資金難のために粗製乱造を運命づけられていた。ディズニーのフルアニメよりもはるかに少ない数のコマで動きを表現せざるをえなかったために、アトムのスタッフは日本のアニメに固有のテクニックを開発した。「トメ絵」と「口パク」である。動きの少ないシーンは「トメ」と呼ばれる静止画で、会話のシーンは口だけを動かす「口パク」で、それぞれ表現した。これらはいわば日本アニメの負の遺産と言うべきものであろうが、「エヴァンゲリオン」の作者の才能はこれを作品の表現技法へと変えることを可能にしたのである。「トメ絵」で人間の緊迫した関係が表現され、「口パク」によってキャラクターの〈酷薄〉さが印象深く表現されることとなった。

「エヴァン」を思い返して印象深いのは、まるで理科の実験室のような綾波レイの部屋の描写である。少女の部屋には似つかわしくない葉の入った袋とピーカーなどがある以外、これといった特徴のない部屋であるが、曰く言いがたいものの形象化のように思えてならない。それを〈死〉もしくは〈リアルなもの〉とやってしまっているものかどうか……

[恋愛学]

高藤 冬武

《遙かなる憧れ、この世では成就せぬ、不幸な、叶わぬ恋、愛は苦悩、愛は死》、中世南フランスに華開いた新しい恋愛思想（宮廷風恋愛）に連なる「禁欲主義的姦通」とでも称すべきものが小説の世界に出現するに至った。愛の充足、完成を拒む、拒めば想いはさらに募る。純潔を最後まで保ちながら（つまり形式的には姦通は成立しない）、身も心も恋の炎にやけ爛れ魂は相手に奪われ、狂乱のうちに悶死する、或いは絶望に世を捨てる。前者は『谷間の百合』のモルソー夫人、後者は『クレヴの奥方』のクレヴ夫人がそ

の例である。満たされぬ《飢え》（恋）はますます貧乏な飢えとなり、想像力を恣に、叶わぬ恋を生きる人妻の懊悩と、〈否定的歓喜〉が描かれる。

我々の欲望をいとも簡単に実現可能たらしめる科学技術の発展とともに〈禁欲〉のたがが外れ（遠くにいる人の声が聞きたい、飛んで行って逢いたい…）、欲望充足と自由を求める現代人登場の「非・禁欲主義的姦通」小説が出現する。恋が実現成就した後にくる幻滅というおぞましき現実と直面するのである。恋愛は一つの情事、一つの不倫と化す。『ボヴァリー夫人』から『幻影に生きる』（D・サルナーヴ1986年）まで、幾つかの作品にその流れを辿った。

[美童学]

福元 圭太

第5回は「美童学」という枠組みで、様々な芸術、特に文学、映画におけるアブナイ美少年の世界をとりあげた。

日本の古典からは、8巻40章、これいづれも男色を素材とする物語で、特に武士社会における衆道を描いた井原西鶴の『男色大鑑』（1687年）、連続テレビドラマでもおなじみの『忠臣蔵』、佐賀鍋島藩士、山本常朝の口述になる、「武士道とは死ぬことと見付けたり」という言葉であまりに有名な『葉隠』（1716年頃）、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』（1802-1814年）などを「男どうしの愛」、「少年愛の本」として解説した。

次に明治から近代文学にかけて登場した美少年と少年愛を森鷗外の『ヴィタ・セクスアリス』、太宰や川端の短編、稲垣足穂の『少年愛の美学』、そして三島由紀夫の一連の作品、特に『禁色』や遺作『豊饒の海』と、『剣と寒紅』などのいわゆる「三島本」、加えて福永武彦の『草の花』などをとりあげた。

話はさらに「西欧の美少年」に移る。ナルシスの神話、古典古代のギリシア、ナルシズムと同性愛、キリスト教と同性愛、フロイトの「ダ・ヴィンチ論」、「エイズ」の問題とゲイ解放運動等に言及した。

最後にやっと専門のトーマス・マン。『ヴェニスに死す』をヴィスコンティによる同名の映画（1971年）を鑑賞しながら論じた。特にグスタフ・マーラーとマンとヴィスコンティの関連に注目、マーラーの音楽も聴いていただいた。

きわどい話に眉ひとつ動かさぬ堂々たる聴衆で、さすが『『超』学問のすすめ』に集わられただけのことはある。質問も出て和やかな雰囲気でした。

[幽霊学]

南條 竹則

今回の講義の目玉講義である。講師は小説家兼英文学者の南條竹則氏。執筆活動でお忙しいなか、とくにご覧いただき、わざわざ東京から出向いていただいた。講義の題目は一応「幽霊学」となっているが、そこは和漢洋の知識に通じた氏のこと、ときに仙術を使って神仙に遊び、ときにクロウリー直伝(?)の呪文を吟じてケルト伝説の奥深く分け入り、といったぐあいに融通無碍、まことにユニークな「超」講義であった。聴講した院生のひとりが「こんなにスリリングな講義は耳にしたことがない」と言っていたが、まさしく至言であろう。氏の話はまず、映画『赤いコーリヤン』の原作者であり、つい先ごろ新作『豊乳肥臀』を上梓したばかりの莫言(ばくげん)との対談のエピソードにはじまり、やがておもむろに氏の小説の題材ともなった「満漢全席」に移ったかと思うと、いつのまにか

私たちは本講義の舞台となる世紀末の英国に運ばれている……。本題で氏が主として論じたのは、英国の二人の偉大な怪談作家、アーサー・マッケンとブラックウッドであるが、交霊術や黒魔術や幽霊屋敷の逸話をそこここに織り交ぜ、受講生の興味を瞬時も逸らさぬ巧みな話ぶりであった。が、氏の語った内容(今日風に言えば「情報」)の豊富さもさることながら、何よりも私たち聴衆を真底から酔わせたのはその語り口、さながら円朝の落語を思わせる粋で軽妙な語り口であった。本当に大切なのは話の内容ではなく、その語り口であること(ふたたび今日風に言えば、発話内容ではなく発話行為であること)、この真理を実地に悟らせてくれたところに今回の講義の持つ大きな意味合いがあったと言えよう。これを要するに、南條氏の講義には、バルトの言う「文学」がたしかにあったのだ。

(森 記)

九州大学では毎年、市民を対象とした講義「九州大学公開講座」を多数開講しています。その一つとして昨年、言語文化部により開講された『「超」学問のすすめ』について、講義を担当された先生方にそれぞれの概要(6回目の南條氏については森茂太郎先生にお願いしました)をお書きいただきました。今号では1~6回目を掲載します。7回目以降は、[性愛学]、[ふらんす学]、[歌謡学Ⅰ]、[歌謡学Ⅱ]でした。(編集委員会)

表紙写真説明 白亜紀(1億2千年前)の環境変動

白亜紀前期から後期にかけて(約1億2千万年前から9千万年前頃)、陸上では恐竜が闊歩し、海ではアンモナイトとよばれる頭足類(イカ・タコの仲間)や巨大な海成爬虫類が大繁栄を遂げていた。しかし、この時代の地球環境には大きな事件が生じていた。誕生して間もない大西洋のほぼ全域で、海洋の底層付近に溶存酸素(海水中に溶けている酸素)の少ない水塊が広がり、真っ黒なヘドロのような泥が堆積するようになったのである。海洋底では、酸素濃度が少ないと、海底に沈積する有機物が分解されないためそのまま残り、黒い堆積物として認識される。この時代には、同じような原因で形成されたと考えられる黒色の堆積物が世界中の地層から報告され、地球科学の分野ではこの現象を海中無酸素事件(Oceanic Anoxic Event)と呼んでいる。この地球規模の海洋環境の悪化は、約3千万年間に少なくとも5回は生じており、中には海洋生物の大量絶滅を引き起こしている時期もある。

白亜紀はいわゆる「恐竜の時代」であるとともに、地球環境の側面からみると地球史の中でも最も温暖な時期である。この時代の地球環境を復元すると、南極や北極に氷床はなく、大気中の二酸化炭素濃度も高かったと考えられている。今後、このまま地球温暖化が進行すると、白亜紀のような世界になるだろうと多くの地球科学者は考えている。そうになると、無酸素事件のような地球規模の環境変動が再び引き起こされ、海底の生物は死滅し、漁業などの人間活動は完全に崩壊するかもしれない。この写真は約1億2千年前の無酸素事件を記録している現場である。黒い部分が無酸素事件を含む黒色の堆積物で、白い部分は環境が回復し正常な海洋環境に戻ったため、再び貝・有孔虫など生物の遺骸が堆積するようになった岩石(石灰岩)である。歴史学と同じように、地球科学の分野でも過去を通じて地球環境の未来の姿をみつめることができる。

西 弘嗣(比較社会文化研究科)

<新任教官自己紹介>



着任の ごあいさつ

いとう かずお
伊藤 一男

平成11年10月1日付けで、数理学研究科に着任しました。どうぞよろしくお願いいたします。

現在の専門は非線形偏微分方程式論で、具体的には合金が冷却されるときに現れるパターンを記述する方程式について研究しています。この分野は、解析学や微分幾何を有機的に使用していく面白さがあり、次々と勉強の範囲が広がり、当分は終わりそうもない気配です。

前任地は北海道大学大学院理学研究科（助手）で、ポプラ並木のすぐそばの建物の中に研究室がありました。歩いていると、学内者よりも観光客の方がすれ違う人が多かったくらいです。今年の夏は北海道も非常に暑く、福岡に来たときはエアコンがあることを確認して心底ホッとしました。（札幌には、営業地を除いて、まずどこにもエアコンがない！）

元々私は福岡の出身で、大学・大学院ともに九大を卒業しましたので、この六本松キャンパスにもいろいろな思い出があります。北大に行ったときは福岡に戻ってくることはもうあるまいと思い込んでいましたから、今回の赴任は私にとって真に驚きでした。自分が1年生のときに聴いた線形代数の講義を、今度は同じ場所で自分がやることになったというのも、なんだか不思議な感覚にとらわれます。その記念すべき初講義で最も印象に残ったのは、学生さんの目に涙を浮かべての大あくびでしたが、これほどリラックスできる時間を提供できてとてもうれしく思っています。

（数理学研究科）



六本松に 着任して

えとう てつじろう
江藤 徹二郎

私が九州大学教養学部の新入生として六本松地区を訪れたのは、およそ12年と半年前です。それから1年半後にこの地を離れ、昨年10月に着任し暫く振りに周辺を散策してみますと、当時存在していたスーパーや時々通った銭湯、そして住んでいた下宿が無くなっていました。しかし昔と違った雰囲気を感じるのには明らかに自身の立場の問題なのでしょう。

当時私は課外活動としてワングル部に所属していました。合宿前には南公園までランニングし、その後動物園脇にある階段で人を背負っての歩荷、ウェイトトレーニング等、良く体を動かしたものだと思います。サークル活動に費やすお金は家庭教師、居酒屋、引越しのアルバイトをして捻出しました。今にして、「若い時は忍耐力があり、また貧乏にも強い。」などと心底感じます。

さて、私は大教センターの教官として学生の皆さんの物理学基礎実験を担当することとなったのですが、少しだけエールを贈りたいと思います。入試のため高校や予備校で頑張られた学生さんも多いと思います。それで大学入学と同時に趣味やサークル活動に打ち込みたくなるのも分かりますし、大切な事だと自分も思います。ただ、早い時期から学習・研究することの意義を曲がりなりにも見つけることができれば、大学生活はさらに充実したものになると思います。物理学基礎実験についても、その物理法則がどのようにして導かれたのかを調べ、現代物理学（及び社会）にどんな影響を与えたのかを想像してみてもいいと思います。それによって自然現象と学問との関係を多少理解し、研究に対する興味も湧いてくると思います。面倒だと言わず、週にもう一日飲むのも遊ぶのも我慢して取り組んでみたらどうでしょうか？！

（大学教育研究センター）



豊かな
anthropodiversity,
訳してヒト多様性, の中で

さいぐさ とよへい
三枝 豊平

今の六本松キャンパス, 当時の大坪町の九州大学第一分校を初めて訪れたのは1955年3月でした。虫の勉強がしたい一心で大学受験にきた昆虫少年に, 生物学教室の白水隆先生は採点中の時間を割いて会って下さいました。3年の夏休みまで虫に明け暮れていた高校生でも大学に合格できる時代でありました。以来45年間, 六本松に根が生えたような歳月を重ねて2000年を迎えることになりました。奇妙な表現ですが, 私にとって六本松は私そのものであったように思えます。

退官という一つの区切りを迎えて, このキャンパスとここで出会った全ての人々に心からお礼を申し上げます。非才な私のような者に, 存分に昆虫学の勉強をさせていただき, 今ある姿に育て上げていただいた事にただただ感謝する次第であります。

六本松はこの間ずっと九大の中では狭隘で劣悪な研究・教育条件と一般教育の過重な負担のもとに置かれてきました。しかし, 今振り返ってみると私は六本松にいて本当に良かったと思っています。研究分野はほとんど全学問領域を網羅し, 自由闊達で, しかも極めて民主的な思想を持った人々が, いつも六本松キャンパスの主人公であったからです。この豊かで多様な人々が醸し出す研究・教育環境, 私にとって生態系そのものの中で, その一員として人生の長い年月をすごすことができたことは, 私が最も誇りとするところがあります。大学の自治を守り, 産学協同を危惧した時代から, 大学が率先して産学協同を唱え, 国立大学の独立行政法人化が論議される今日まで, 半世紀の間に大学をとりまく状況は著しく変わってきました。しかし今こそ, 六本松の思想と, 文化としての研究・教育活動を自由に展開することが保障される大学, これを守り通し, 九州大学全体に広めて下さることを祈願して, 区切りの挨拶とさせていただきます。

(比較社会文化研究科)



六本松での
33年間

そのだ ごろう
園田 五郎

文学部助手から教養部心理学助手に配置換となったところで学園紛争の嵐が吹き始めました。あれからもう30年余が経ったこととなります。この度やっと卒業の運びとなりました。さまざまな面で支えて頂いた多くの方々に感謝とお礼を申し上げます。

教養部着任のときクラス担当だった学生のお子さんが本年4月新入生として挨拶にみえました。「父からもよろしく云々」というのです。このことは30年という数字以上に在職期間の長さを実感させてくれました。その新入生の父親は学園紛争の頃の教養部生で, 本館の封鎖解除のあと夜半に自宅を訪れたクラス学生7・8人のうちのリーダー格がその人でした。大学自治, 学生の自治など一部に口論となったりしながら朝まで話し込んでしまいました。あの当時クラス学生と担当教官とは対立しながらも接する機会が今よりはるかに多かったと思います。

幸か不幸か私は教養部学生委員会の常任委員に定められ学生自治会執行委員の学生諸君との話し合いに列席してきました。紛争が沈静化してゆく頃から参加しましたので, 野次や怒号はわずか一部分に残っている程度でその点では幸いだったと思います。1回の話し合いは2時間を超えないというルールも確立してきました。話し合いにより学生の理解と協力を求めてゆくという学生委員会の伝統は可能な限り持続してほしいと願っています。

九大を去るにあたり, お世話になった諸先輩, 同僚の教職員の皆さん, 共に学び遊んだ学生諸君に心からお礼を申し上げます。 (健康科学センター)



第52回九大祭

投稿, 写真歓迎

- 編集委員会ではradixへの投稿, 紙面を飾る写真を募集しています。六本松地区にまつわる出来事, あなたが関わっている様々な活動, 六本松の思い出など, 記事の内容は六本松地区および六本松に関わる人々に関するものであれば何でも結構です。写真も, キャンパスでのもの, 旅先でのものをはじめ, あなたの作品, 又は是非紹介したいあなたのお知り合いの作品など, 広く募集しております。カラー写真をお寄せください。応募および推薦の対象は, 六本松に関わりのある全ての方です。例えば:
 - 九州大学の在学生, 卒業生, 元在学学生
 - 全学共通教育に関わる教職員, 非常勤講師, 職員
 - 六本松地区の旧教職員, 旧関係者
- 記事のアイデアをお寄せください。何か興味深い話や出来事などありましたら, お知らせくだされば編集委員が取材に参ります。

応募・投稿・推薦は, 以下の者がお受け致します。

radix 編集委員

石田(比 文) 因幡(事務部) 大柿(健 セ)
河合(理学部) 小山(大教セ) 因 (留 セ)
濱野(アドミッションセ) 松村(言 文)

六本松地区企画掛 (本館1階奥)

あ と が き

あけまして おめでとうございます。ラーディクス23号をお届けします。ミレニアムという呼称に関しては異議のある方もおられるかと思いますが, 本号はそのミレニアムを迎えての第1号となりました。

本号の特徴は, 海外留学関連が4編と少人数ゼミナールAやフィールドワークに関する記事が4編寄稿されている点です。海外留学では異文化の中での苦労や貴重な体験がひしひしと伝わってきます。また, 少人数ゼミナールやフィールドワークでも, これまでの教室内での講義では体験できなかった授業内容であることが文面から理解できます。いずれも学生諸兄姉や担当教官の貴重な体感の記録です。暗い話題が多い中, 21世紀を担う新しい息吹に期待したいと思います。

新任教官5名を迎えた傍ら, 3名の先生が本年3月に停年退官になります。いずれの先生も九大入学以来40年以上を経, 六本松でも30年以上の長きにわたって教育・研究に励んでこられました。また, 大学封鎖も体験し, 学生諸兄姉との対話の重要性も体感されてこられた方々です。有村先生, 三枝先生, 園田先生, 本当に長い間ご苦勞様でした。そして有り難うございました。今後のご健康と新しい人生での益々のご活躍をお祈りいたします。 (T O)

お詫びと訂正

九州大学名誉教授の山口宗之先生より, radix22号の記事について次のようなご指摘がありました。

「…桜坂の飢人地蔵(15頁)中, 『五拾回忌 安政十年…』とありますが, 安政は六年までしかありません……」

さっそく桜坂へ行って飢人地蔵を調べてみますと, 碑には「五拾回忌 安永十辛丑年四月四日」と刻んでありました。「安政十年」は「安永十年」の誤りです。謹んで訂正いたします。 (編集委員会)

radix (ラーディクス) No. 23 (九州大学全学共通教育広報)

発行日 平成12年1月12日

発行所 九州大学大学教育研究センター

〒810-8560 福岡市中央区六本松4-2-1

電話 (092) 726-4525・4526 (企画掛)

FAX (092) 726-4530